

<「知るっば!久留米」 令和2年11月26日(木) 12:30~放送分>

久留米絣 ～第4回～ 久留米絣の今(3)

<ゲスト：久留米絣 山藍 重要無形文化財技術伝承者 柿原 真木子さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

11月は、久留米の伝統産業である『久留米絣』をテーマにお送りしております。

ゲストは、この方です。

ゲスト:柿原真木子さん (以下「柿原」)

久留米絣山藍(やまあい)の柿原真木子と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

坂本 柿原さん、今週もよろしくお願いいたします。

柿原さんは、久留米絣の作家さんということで、デザインから染め、織りと、一貫して絣を作っているということ、先週お話を伺いました。

まず、最初のデザインを考えることが大事で、大変なご苦労もあるということだったんですが、デザインをお考えになるとき、その発想がどこから浮かぶのかお聞かせください。

私たちは素人なので、どんな風にデザインができていくのか疑問に思うんですね。

まず、そのあたりを教えていただけますか？

柿原 そうですね。久留米絣の「十の字」や「霰(あられ)」、「井桁(いげた)」のようなみなさんがよく思い浮かべられる幾何学模様というのは、昔からある伝統的な模様なんです。

ただ、最近では久留米絣もおしゃれになってきています。

作家さんたちも独自にデザインを描いて、どんどんモダンな作品も増えてきていますね。

坂本 確かに、最近の絣は様々な柄や模様がありますよね。

柿原 やっぱ、自分がデザインを発想するときって、本当に何気ない瞬間にアイデアが落ちてくるんですよね。

坂本 ああ～、デザインが降ってくるという感じですか？天から降りてくるというんでしょうか…。

柿原 よく言うじゃないですか、でもそのとおりなんですよ。

坂本 今、朝ドラなんかでも作曲家の古関裕而（こせきゆうじ）さんが、『天から降ってきた』とか言いますよね、そんな感じなんですか？

柿原 そうなんです。
例えば、近所におつかいに行っている時に畑のブドウを見て、「きれい〜」とか思っていたら、「そのブドウを反物に載せたらどんな感じかな？」みたいに突然アイデアが降ってくるんですよ。

坂本 風景を見たり、モノを見たりして思いつくこともあるでしょうけれども、時には何もなくても湧いてくることもあるんですか？

柿原 そうなんです。四六時中、緋のことばかり考えているからかもしれないですけども、面白い建物の形であったり、標識であったりを見ただけで、「ああ、これなんか緋の模様にしたら絶対面白い！」とか思ったら運転どころじゃなくなります。

坂本 そこは安全運転でお願いしますね。笑

柿原 もちろん安全運転で、はい。

坂本 では、デザインをどのように緋に転換するのですか？
風景とか、発想したものを緋に転換していく作業がありますよね？

柿原 そうですね。そこが一番難しいところで、緋はとにかく計算をしないといけないんですよ。古いデザインは、過去の作品や記録があるのでいいんですけどね。
やっぱり新しく考えたデザインを緋にする難しさっていうのは、緋として作品が成立するか、緋の技法が成立するかが、この計算にかかってくるんですよ。
やっぱり、ここがモチーフを決めるときに一番悩むところでしょうね。

坂本 緋として成立するかどうかというのは、まずは図面みたいなものを描かれるんですか？

柿原 そうなんです。
それこそ緋って 200 年ぐらい前にできたものなので、今でも計算って尺貫法なんです。

坂本 そうでしょうね。

柿原 糸は伸び縮みするし、その伸縮率は糸の太さによっても変わってくるので、そういうところを最初に計算に入れておかないといけません。
例えば、ひとつの丸(模様)から次の丸までの間に何本の糸が必要かを最初に計算して、「ああ、百何十往復したら次の丸までくるんだ」みたいな。
そういう作業というか計算が、緋として大変な部分のひとつですね。

坂本 気が遠くなりそうな作業なんですけれども、まずは手書きで図面の上にイメージを落としていかれるのでしょうか？

柿原 そうですね。まあ、最近ではパソコンを使われる作家さんもいらっしゃるかもしれませんが、私はもともと絵を描いていたこともあって、パソコンのマウスで曲線を描くのとフリーハンドで描くのでは納得具合が全然違います。

坂本 やっぱり手書きで図面を作っていく良さみたいなものがあるって、それが柿原さんのこだわりということですかね。

柿原 ただ、一番難しいのは、図面に落としたイメージを最終的に織物として糸で表現しないといけないところにありますけどね。

坂本 織って模様なり柄なりを出していくっていうのは、それはなかなか難しい話ですよ。そんな久留米絣ですけれども、私たちは素人ですので、久留米絣のどこを見て選んだり、買ったりしたらいいのかアドバイスをいただきたいのですが、そのポイントみたいなものはありますか？

柿原 そうですね。ぜひ1枚は、手織りの最高級絣を買ってほしいなっていうところはあります。ただ、久留米では手織りだけではなく機械織りでも素晴らしい作品がたくさん出ていますし、機械織りは化学染料を使いますので比較的安価で手に入ります。まずは、ご自分が着たいと思われる着物であったり、お洋服であったり、小物であったりを選んでいったらいいのかなとは思いますがね。

坂本 まずは入門でひとつ何か絣のものを身に着けてみて、それから徐々に増やしていくといいですね。

柿原 そして、最終的にはぜひ手織りをと思います。

坂本 最終的には、手織りの着物でも購入してもらえるといいですね。私も夏場は絣のワイシャツを日替わりで着ています。全部で5着は持っていますので、月火水木金はもちろん、遊びに行くときにも着たりと色々な楽しみ方をしています。絣の特徴といえば、「藍(あい)」でもあるんですけど、柿原さんのいらっしゃる工房の山藍(やまあい)さんは、天然藍染めにもこだわっているとお聞きしています。この藍染めについても、何かお話があったらお聞かせください。

柿原 そうですね。この藍染めっていうのはとっても奥が深い染料なので、実はこのシリーズの1回分を使い切ってしまうくらいの話の長さがあるんですけども。

坂本 それは大変ですね。1週分延長しないといけないかもしれないですね。

柿原 ただ、この藍染めというのは、化学染料が登場するまでは世界中で使われていた染料だったんですよ。

もちろん、日本でもこの藍染めはとて有名で、久留米絣の世界でも使われています。

ただ、やはりとても手間と時間がかかるんですよ。

それに、藍は管理をしていくのも難しいってところがあるんですよ。

坂本 藍甕(あいがめ)の管理が難しいんですよ？

柿原 そうなんです。

ただ、何とも言えないこの藍色の深みっていうのは、みなさんにも手に取って見ていただきたいです。

化学染料には出せないこの青い色素っていうのは、自然界の中でも本当に貴重な染料なんですよ。

青い色素を持っている植物ってとても数が少ないので、昔からとても高価な染料だったんです。

坂本 引き込まれるようなお話ですね。

最後のお話ですが、作り手の立場から「久留米絣のこれから」についてお話をお聞かせください。

柿原 よく伝統技術という言い方をされるんですけど、この伝統っていうのは今も生きているんです。

職人さんたちがその技術をずっと繋いでいくことで、伝統っていうのは繋がっていくものなので、

若い方に技術を引き継いでもらいたい気持ちがあるんです。

ただ、作り手としては、やはりみなさんにもこの久留米絣をたくさん使っていただきたいとも思います。

坂本 技術保存はそれを愛用するところからということで、私もまた絣を身に着けたいと思います。

久留米絣に関する質問やお問い合わせについては、

歴史・重要無形文化財の伝統的な技術に関することは、

久留米市役所本庁舎12階久留米市文化財保護課内にある(公財)久留米絣技術保存会までお願いします。

電話番号は、0942-30-9322 です。

また、久留米絣の販売など全般的なことにつきましては、

地場産くめにあります久留米絣協同組合までお願いします。

電話番号は、0942-44-3701 です。

柿原さん、本当に素晴らしいお話をありがとうございました。

今後も久留米絣をよろしく願います。